

市民団体の役割

ここでは主に、「小樽文化遺産」の保存、活用にかかわるNPO法人や、まちづくりに関連するボランティアを意味する。これらの団体は、「小樽文化遺産」の保存、活用に参加する地域の担い手のリーダーとして、それぞれの立場や専門分野の知識を生かしながら、地域の活性化を実現する。

民間事業者、民間団体等の役割

民間事業者や団体等は、主に「小樽文化遺産」を所有、活用する役割としての存在であることが多い。上記の各種団体と同様に、それぞれの立場や専門性に立脚しつつ、民間のノウハウ等を生かし、活用の手法に寄与する。また小樽市においては、「小樽文化遺産」そのものが観光都市としての魅力を創出する重要な要素として活用されており、地域の魅力向上にとって不可欠な存在となっていることから、民間事業者はこれらが適切に保存、活用されるよう、それぞれの立場に於ける責務を果たし、「小樽文化遺産」の重要性について普及、啓発活動に努める。

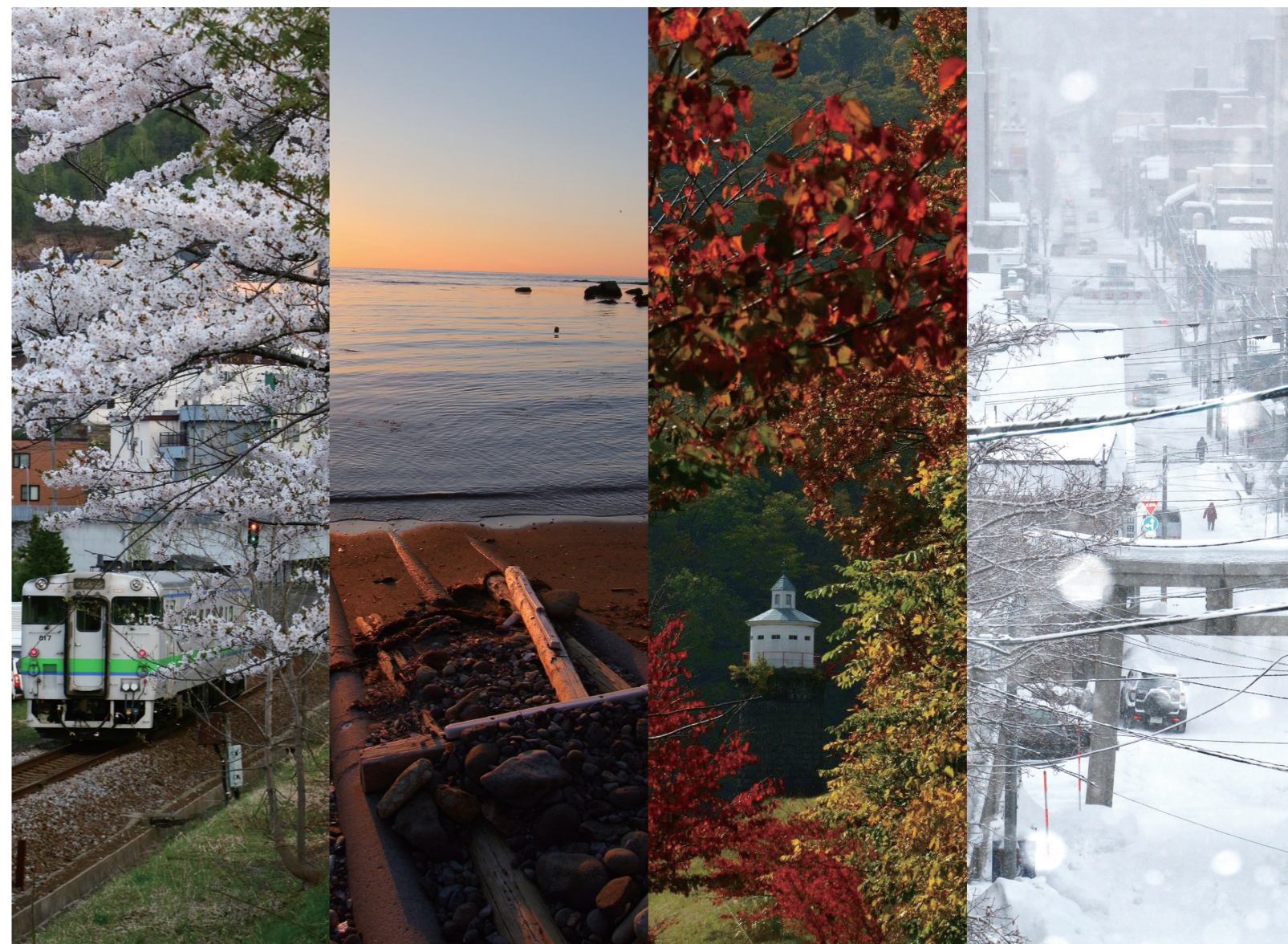
大学などの教育研究機関の役割

大学などの教育研究機関は、教育活動を通じた「小樽文化遺産」に対する意識の向上に取り組むとともに、保存や活用にかかわる人材の育成や、それらの効果的な手法の開発などに努める。また、産官学の連携などにより、「小樽文化遺産」の新たな付加価値の創出や情報発信に貢献する。

行政の役割

文化財保護行政に求められているのは、本構想の理念を確実に捉え、地域の財産である文化財(当市において「小樽文化遺産」として守るべきもの)を、適切に保存管理、活用していくことである。そのためには、まず行政の内部において、深い知識を持つ人材の育成に努めるとともに、関係部局が連携し、「小樽文化遺産」を基盤としたまちづくり、地域づくりを推進する。また、あらゆる主体のコーディネーターとしての役割を担うとともに、市内外はもとより、国外も視野に入れた幅広い情報発信に努める。

多様な主体がそれぞれの役割を活かし、お互いに補完しながら連携する必要がある



小樽市歴史文化基本構想の策定経緯と位置付け

小樽市歴史文化基本構想策定の背景と目的

小樽市は、幕末からニシン漁や弁財船(北前船)の交易などで栄え、明治以降には鉄道や港を通じた物流や商業活動などで発展した、北海道の中でも歴史の深いまちです。近年では、小樽運河やガラス工芸品、海産物、そして歴史的なまちなみなどが観光資源として人気が高まり、平成30(2018)年現在では、観光客入込数800万人を超える観光都市として全国に知られています。

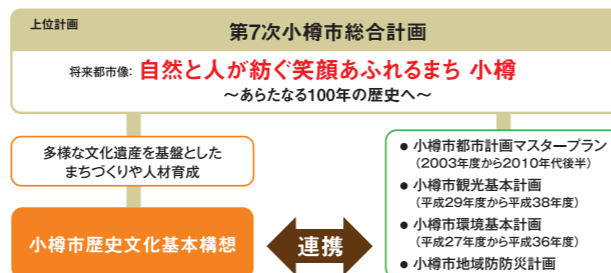
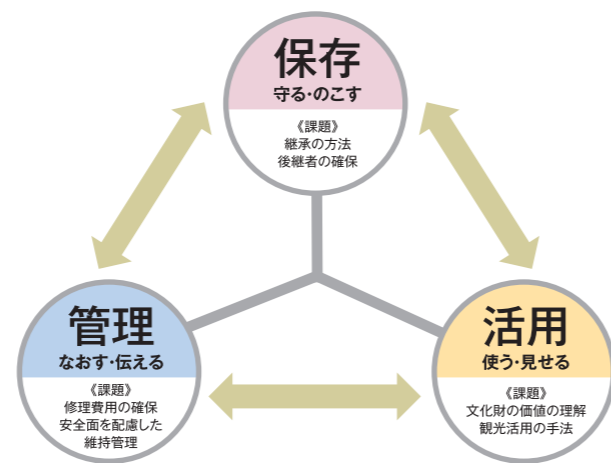
市内には、幕末から明治にかけての移住者によって持ち込まれた全国各地の生活習慣や民俗芸能をはじめ、明治大正期に建てられた近代建築など、多様な暮らしの背景を持つさまざまな文化財がのこされています。

しかし、小樽を形成してきた文化財は、現在危機的な状況を迎えつつあります。建築後100年を経過した建物は、老朽化が進み維持が困難となっています。また、産業構造等の変化により、多くの建物が建設当時とは別の用途として活用されているものの、大規模改修若しくは改修困難な状況から解体の選択を迫られています。民俗芸能や祭礼についても、市内で顕著な少子高齢化の影響による後継者不足が浮き彫りとなり、今後の維持が困難とされるものが多くあります。さらに、家庭や地域で担ってきた伝統的な文化の継承は難しい状況であり、既に消滅したものもあります。

本構想では、市内各地にのこされてきた自然を含む文化遺産を調査確認し、我がまちの持つ豊かな文化遺産の持つ意義の周知につとめ、市民意識の成熟を推進することを目的とします。そのため、「小樽市歴史文化基本構想」は、小樽市の多様な文化遺産を基盤としたまちづくりや人材育成に重要な役割を果たし、市民とともに「小樽文化遺産」の保存活用に取り組むためのマスタープランとして策定しました。

構想の位置付け

小樽市の最上位計画である小樽市総合計画や関連計画における各部局のあらゆる事業や施策について、地域の歴史や文化の特性が反映されるよう、本構想による強い働きかけが必要であり、これにより小樽文化遺産を基盤としたまちづくりや人材育成のより一層の推進を目指します。



小樽市の歴史の概要

縄文時代	(BC13000年頃～BC200年頃) 現在のところ市内最古の集落跡はおよそ8000年前である縄文時代早期の「塩谷3遺跡」である。また、市内で確認されている8割が縄文後期の遺跡であるが、代表的なものとして「忍路環状列石」(国指定史跡)、「地鎮山環状列石」(道指定史跡)などのストーンサークルが挙げられる。
縄文時代 続縄文時代	(BC200年頃～600年頃) 「陰刻画」が刻まれた「手宮洞窟」(国指定史跡)が全国的に有名である。続縄文時代の洞窟遺跡は、国内では「フゴッベ洞窟」(余市町)と手宮洞窟のみで、アムール川流域などの岩壁画との関連が考えられる。続縄文時代から擦文時代への過渡期の遺跡から、サハリン製の耳飾りなども出土しており、小樽周辺と北方との関係が示唆される。
擦文時代	(600年頃～1200年頃) この時代の遺跡は、蘭島遺跡群など、交易の拠点となりやすい河口付近の微高地に広がる。続縄文時代以前と比べ、遺跡の数は少ない。
アイヌ文化期 (中世アイヌ期)	(1200年頃～1600年頃) 市内に残されたこの時期の遺跡としては、3か所の「チャン」が該当する。また、小規模な河川の河口部にある船浜遺跡では、その時代に属する可能性のある遺物が出土している。
近世	(1600年頃～1868年) 近江商人の西川家と岡田家による「場所請負」が行われ、小樽周辺のアイヌの人々の様子も記録される。初期はアイヌの人々、後期は道南から出稼ぎに来た漁民たちによる大量のニシンの漁獲があった。特に18世紀末、本州方面で田畑の肥料として、粕の大規模利用が開始されると、ニシン漁は次第に大きな産業となった。積丹半島以東での和人の越年が許可され、1865年には小樽は箱館奉行所の出先の「村並」となった。
明治時代	(1868年～1912年) 明治政府は札幌を北海道の拠点とするため、小樽を供給基地とすべく、港湾を整備。明治13年官営幌内鉄道が敷設され、小樽港は空知地区等で産出された石炭の国内への搬出港となる。やがて鉄道は道内に張り巡らされ、その起点である小樽は物流と経済の拠点となっていく。また、ニシン漁も最盛期を迎え、出稼ぎ漁夫などが多数来樽し、地域文化を伝えた。明治40年代には港湾の発展は隆盛を極め、全国屈指の経済都市、港湾都市となる。
大正時代	(1912年～1926年) 明治時代の好況は大正時代に引き継がれる。経済活動の盛況ぶりは、現在も数多く残る銀行建築からしのぶことができる。この時代、小型船(はしけ)から倉庫へと荷物の受け渡しを行う「はしけ荷役」作業を効率化するため、海岸の埋立工事が行われた。埋立工事によって生まれた水路が現在の「小樽運河」である。大正9年の第1回国勢調査では、全国で13番目の人口を誇った。人口増加と商業の担い手育成のために、地元実業家が私財を投入して学校を誘致したのも、この時代である。
昭和時代 (戦後期から平成)	(1945年～現在) 戦後、昭和30年代に入り、国のエネルギー政策の石油への転換や、港湾貨物の取扱が太平洋側にシフトするなどの理由から、港勢は衰えた。昭和30年代後半からは、市街地にあった銀行や商社、貿易関係の会社の撤退が相次いだ。港と石炭輸送で栄えた小樽の経済は衰退し、「斜陽のまち」と呼ばれた。そのような中、本来の役目を失った小樽運河の埋立てをめぐる「運河保存運動」は、古いものに新しい価値観を与えた市民主体のまちづくり運動となった。現在、小樽運河は観光都市小樽のシンボルとなっている。

小樽市の関連文化遺産群

小樽の歴史を物語る「小樽文化遺産」を、8つの関連文化遺産群に分類しました。

1 近世以前の自然、地形を生かした暮らしの文化遺産群

小樽ではストーンサークルや洞窟陰刻画など、千年以上前の人々の営みを実際に見ることができます。国指定史跡「忍路環状列石」がのこる忍路・蘭島などの市西部エリアに加え、中心市街地からも土器片などが出土しており、市域全域で古代の人々の暮らしを知る手がかりがのこされています。



2 ニシンとともにやってきた文化遺産群

江戸時代後期から大正時代まで北海道の基幹産業であったニシン漁において、小樽は特に質が高い大量のニシンが漁獲出来る千石場所として知られていました。ニシンを通じて密に関連し合った文化遺産群は、北海道内に留まらず、北前船などによって本州とのかかわりを深く持つものもあります。



関連文化遺産群は、次の条件で設定しました。

- ①小樽の姿、あゆみを物語るもの
- ②関連文化財群の中で強い共通性を持つテーマを有すること
- ③将来にわたり保存継承する必然性あるもの

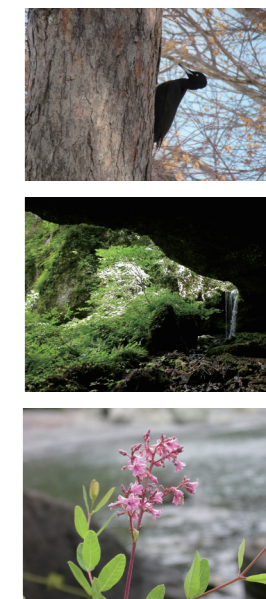
5 歴史を伝える画像資料群

豊富な被写体をとらえた古写真、絵葉書、フィルムなどは、小樽の歩みを物語る貴重な資料群です。最新機材の導入や高級な市民文化の流行から、当時の小樽の繁栄ぶりもうかがえます。



6 小樽の風土を象徴する自然遺産群

気候・地形・地質・生態系といった地域を取り巻く自然環境は、小樽特有の文化・風土の形成に大きな影響を与えてきました。自然史については専門家・ボランティアによる継続的な調査研究が行われています。



3 北海道の玄関として開かれた港と鉄道の文化遺産群

明治中期以降、小樽が飛躍的に発展したきっかけは港と鉄道の整備でした。全国的に見ても早い時期から港と鉄道が整備された小樽では、多くの人とモノが行き交い、のちに北海道の物流の拠点として日本の近代化を支えました。

橋や線路、機関車などのほか、小樽の代表的なまちなみである石造倉庫群もその遺産といえます。



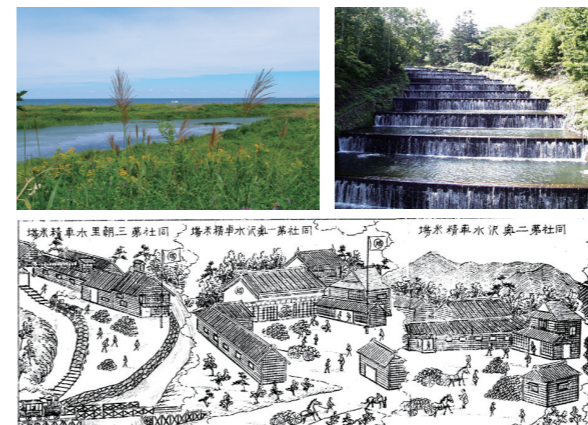
4 北日本随一の経済都市の面影を伝える文化遺産群

明治初期から多くの職種の店舗がそろっていた小樽では、明治中期に物資の集積地となって以降、さらに多種多様な業者が増え、商業活動はますます活性化しました。最盛期小樽の経済状況を端的に表すのが銀行数で、大正末期には12～15行の銀行が集まっていました。また経済界で成功した人が学校誘致や社会福祉を通じまちに貢献した例も多々あります。



7 水と産業の文化遺産群

市内に流れる河川は、古代から水運や生業の場として活用されてきました。また近代に入ると、豊富で上質な水源を利用した醸造業や清酒業が起り、消防や上水道施設の整備にも役立てられました。



8 民の力・協働と互助の文化を示す文化遺産群

小樽の歴史には市民運動が歴史を動かした背景があります。明治期の学校誘致や社会福祉施設の設立から、現代に至る運河保存運動、各種の市民主体のイベントに至るまで、「民の力」は小樽のまちづくりに欠かせないエネルギーと言えます。

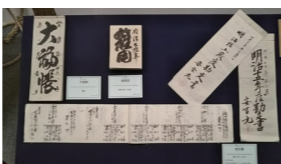


小樽文化遺産の概要

小樽市に存在する多数の文化遺産は、歴史的な背景により、個別の範囲で完結する例は少なく、市域全体に関連する要素が散在しています。構想では、それぞれの文化遺産が持つ性格に応じ、市内の文化遺産を6つのジャンルで整理しました。

(1) 文字で伝えられた文化遺産

本市には、膨大な文書資料群が保存されている。公文書や日記・日誌を含む私文書や、古くは江戸時代の場所請負商人の古文書類から、戦争中の小学校の学級日誌、現代では「運河保存運動」に関するまちづくり運動の資料群など、全国的に見ても貴重な資料群がのこる。



(2) モノに込められた文化遺産

小樽で暮らす人々がのこした、道具や器具。約8千年前の縄文土器から、平成の学校資料までを含む、膨大な資料群がのこる。小樽の特徴を表すものとして、生産関係資料(ニシン漁具、菓子木型など)、生活娯楽資料(スキーなど)がある。宗教関係資料として平安時代の仏像もあり、歴史的価値が高い。



(3) 建築・土木・史跡 土地に刻まれた文化遺産

小樽の人々の生活、産業を支えてきた土木、建築遺産などは、日本を代表する近代建築群であり、現在小樽を代表する景観を形成している。また、土木事業の文化的価値についても、各文化財群との関連付けが重要である。



(4) 景観から生まれた文化遺産

「港と坂のまち」小樽は、その地形や自然、まちなみが多くの文学、楽曲、映画、絵画等の舞台・モチーフとなってきた。それらは小樽が持つ社会的、歴史的背景と景観があいまって生まれた作品である、独自の文化遺産と言える。



(5) 暮らしとともにある文化遺産

明治以降、全国からの移住者が集った小樽では、各地の文化・風習・祭礼等が持ちこまれ、モザイク状に存在していた。これらの有形、無形の民俗文化財に加え、暮らしとともにあるまちの「景観」もまた、小樽らしさを示しているため、このジャンルに含める。



(6) 私たちを包む自然と文化遺産

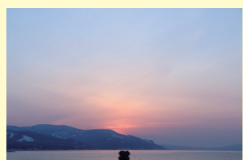
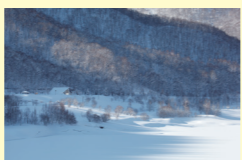
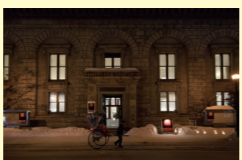
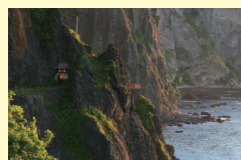
小樽を取り巻く自然環境は、長い年月の中で他の地域とは異なる独特な様相を示している。この環境は、地域に暮らす人々にとって、固有の歴史文化の形成に深く関わっている。地質、気象、動植物やそれらを研究した記録などもこのジャンルに含める。



小樽を特色付ける14のエリア 「将来に伝えたい小樽らしい景観」

小樽は地区ごとに特色ある歴史と文化遺産が存在しています。その特色から市内を14のエリアに分け、エリアごとに景観を紹介しました。

- ① 忍路エリア
- ② 塩谷エリア
- ③ オタモイ、長橋エリア
- ④ 祝津、高島エリア
- ⑤ 手宮、石山エリア
- ⑥ 山の手エリア
- ⑦ 入船川エリア
- ⑧ 運河周辺エリア
- ⑨ 勝納川エリア
- ⑩ 朝里エリア
- ⑪ 朝里川温泉エリア
- ⑫ 張碓エリア
- ⑬ 銭函、桂岡エリア
- ⑭ 銭函海岸



(写真は眞柄利香氏提供)

小樽文化遺産の保存管理と活用のための指針

小樽文化遺産の保存管理と活用のための基本方針

市民が暮らしの中で小樽文化遺産に対する関心を持ち、それらに対して行政を含めた市民全体で情報を共有し、市外から訪れる人々に対して小樽独自の魅力を伝えるためには、市民一人ひとりの習慣や風習・価値観が背景となって形成される「小樽文化遺産」を誇りと愛着をもって継承していく必要があります。本構想では小樽文化遺産に対する基本理念や、小樽文化遺産を保存管理するための方針、活用するための方針を以下のとおり定めます。

本構想の基本理念

小樽の多様で特色のある歴史と人々の生活の中にある文化遺産を

みいだ
見出し、守り、伝え、そして使う

保存管理するための方針			活用するための方針
みいだ 見出し	守り	伝え	使う
小樽文化遺産の多様な価値を見出す(調査・研究)	小樽文化遺産の特性に沿った保存と活用を図る(小樽文化遺産の保存と管理、周辺環境の保全)	小樽文化遺産を支える人々の輪を広げる(情報の発信と次世代の人材育成)	「小樽文化遺産」を活かした魅力あるまちづくりを推進していくよう、各方面に働きかけていくこと
 地域の伝統をたずねるワークショップ	 定期的に運河清掃を行うボランティア	 市内小中学校での文化財公開	 文化遺産フォーラム

小樽文化遺産の保存管理、活用を推進するための体制整備

小樽文化遺産の適切な保存管理、活用を推進していくためには、市民団体・民間事業者・大学などの教育研究機関、そして行政が主体となって、それぞれの役割を果たしながら、小樽市全体として小樽文化遺産の保存・管理・活用に取り組んでいくことが重要です。本構想では、地域や社会全体で文化遺産の新たな価値を見出し、継承活動を支援する仕組みづくりを進めていきます。

市民の役割

市民は、「小樽文化遺産」と最も身近な存在である。

ある人はそれらを所有し、ある人はそれらを活用し、また、ある人はかわり、触れる側としての存在となり得る。これらの市民一人ひとりが日常生活において文化遺産の価値を理解し、地域への愛着と誇りを持つことにより、文化遺産が存在する生活空間を大切に守り育てようという意識の醸成が可能となる。

その結果、市民が「小樽文化遺産」の保存、活用などの活動に積極的、主体的に参加し、適切かつ、暮らしに密着した多様な保存活用の担い手となる。